

書評

梯 明秀著 『経済哲学原理』

山中 隆次

太平ムードで一杯なのに、マルクスの『資本論』は飛ぶような売れ行きだそうである。これはいつたいどう理解したらよいのだろうか。もうじき『資本論』出版一〇〇年祭がやつてくる（『資本論』第一巻初版は一八六七年に出版された）。おそらくマツリの好きな日本人のことだから、福祉国家のものとて、大々的な資本論祭りがくりひろげられることだろう。いや、そのハシリは出版界等に、もうあらわれている。しかし『資本論』出版一〇〇年を祝って、われわれに何か御利益でもあるのだろうか。いくらかでも生活は楽になるのだろうか。どんな祭りをやるのか知らないが、正直な話、あまりお

祭りさわぎはやつてもらいたくない。一〇〇年も経つのに、まだこんなところか、とマルクスにおこられそうな気がしてたまらない。それにしても、『資本論』の売れ行きは大したものらしい。買っていittai、どんな読み方をしているのか、ちょっと余計な心配もしてみたくなるほどだが、しかし「学生時代には、『資本論』の一冊ぐらい読んでおいた方が、いいのでしょうか」と、最近の学生から質問を受けるとなると、そんな心配もけつして余計なものとはいえない。こんな質問を受けたとき、最初は相当なショックだった。「読む必要はない」と、いささかむつとして答えたが、最近はだいぶ馴れて、こちらもニヤニヤしながら「読んでおいた方が、いいだろうね」と答えることにしている。そのせいで『資本論』の

売れ行きも良いのだろうが、それにしても困った話である。

「論語読みの論語知らず」という言葉があるが、『資本論』はけつして「読んでおいた方がよい」という形で読まれる書物ではない。そういう読み方は、『資本論』にたいする冒瀆であるばかりでなく、『資本論』から相当のシッペ返しを受けることであろう。『資本論』と限らず、古典といわれるものは、それほどの偉力をもつている。といって、なにも『資本論』にしりこみする必要はない。要は、たんに知識や教養としてでなく、もとと主体的に『資本論』を読んでもらいたい、ということである。そしてそのことを教えてくれるのが本書、梯明秀教授の大著『経済哲学原理』である。

本書については、出版当時すでに、数多くの書評紙や学生新聞で、また本学会誌でも梯教授還歴記念特集号として出版された第十一卷第五・六号で、平井俊彦氏によってとりあげられている。いすれも簡にして要を得た紹介、論評であるので、今回本註編集者の一人から本書の書評を依頼されたとき、いまさらの感なきにしもあらずであった。しかし、さきにのべた最近の学生の状況をみると、このさいあらためて本書をとりあげることも、あながち無意味ではないと判断し、

浅学をかえりみず、ここにあえて筆をとった次第である。

(1) 発表された新聞の日付順序にしたがつて

(1) 田中吉六氏(『図書新聞』昭和三八年二月二三日号)

(2) 清水正徳氏(『週刊読書人』昭和三八年三月四日号)

(3) 花田圭介氏(『日本読書新聞』昭和三八年四月二二日号)

(4) 元浜清海氏(『京都大学新聞』昭和三九年一月一三日号)

などがある。

一

ところで、さきに私は、『資本論』を主体的に読み、といった。それは具体的に『資本論』に即していようと、どういうことであろうか。それを最初に教えてくれるのが、本書の第一篇、とくに第二章「マルクス主義経済哲学の成立の必然性」である。『資本論』がひとつの中間体系をなしているものだとすれば、そうさせている何かがあるはずだ。それが「端緒」(Anfang)というものであるが、それならば、それは資本論冒頭の商品であろうか。たしかに叙述上そくなつてゐる。しかし、それはいかなる意味で、またどういう商品で

あらうか。たしかにレーニンもいっているように、資本制生産の第一の特徴は、商品生産の普遍化である。しかしながら二の特徴として、労働力の商品化をあげていることを、われわれは見おとしてはならない。そして、この労働そのもの、人間労働力の商品化こそが、これまでの社会形態では例外的、偶然的にしかみられなかつた商品生産を、資本制社会において一般化したのである。要するに、『資本論』を体系たらしめている原理的根拠（＝端緒）として、『資本論』の冒頭におかれた商品は、資本制社会において人間的生활をなしうるためには、商品として自己の労働力を売り且つ疎外されてなければならないという資労働者の自己矛盾的構造、この「人間商品」化の構造を対象的に定立したものとしての商品なのである。だから、それは、たんに資本制社会の生産物は一般的に商品だから、という単純な意味で、『資本論』の冒頭におかれた商品なのではない。そのようにみるのは、客觀主義的解釈であつて、われわれはもつとのさい、『資本論』がマルクスによつて、なんのために書かれたのかを、想起すべきだ。『資本論』はプロレタリアートの立場から、資労働者の階級的自覺をうながすために書かれたのであり、この実践的

直觀を出発点として、マルクスはイギリス古典経済学の成果を批判的に攝取しつつ下向し、この「人間商品」の自己矛盾的構造の対象的表現としての商品範疇に到達した。つまり下向そのものがすでに目的論的であり、したがつて到達した「商品」範疇も、たんなる生産物としての商品でなく、「人間商品」の自己矛盾解決の運動を潜在的に内包している商品であり、その意味ではヘーゲル弁証法の概念的自己展開を唯物論的に発展・繼承したものである。こうして、『資本論』は、さきにのべた意味での商品等々の対象的世界の運動を通して、はじめは無自覺な資労働者が階級的に自覺するように上向的に叙述されているのである。この意味で、『資本論』はプロレタリアートの立場と科学性と弁証法の統一として、いわゆるマルクス主義の三源泉の統一として、もう少しくわしくいいうならば、プロレタリアートの立場にたちながら、イギリス古典経済学にみられた剩余価値の法則的理解と、ヘーゲル哲学の向自由の論理構造との発展的繼承として、うみ出された「経済哲学」にほかならない、と本書はみる。

われわれは、このように『資本論』をたんなる経済科学の書としてではなく、経済「哲学」としてとらえ、『資本論』冒

頭の端緒としての商品を、たんに客体的でなく、賃労働者の商品化構造の客体的契機としてとらえているところに、本書の主体的特徴を見ることができよう。『資本論』の、あるいはマルクス経済学の科学主義化が横行している今日、このような『資本論』の主体的把握の論理的解明を目的とした本書は、非常に有益な解毒剤といえよう。

三

ところで、資本制社会において、賃労働者は商品化されてゐるとして、それはどのような論理構造をもつてゐるのであらうか。これが本書第二篇「賃労働者の範疇的把握」の中心テーマであり、また本書のほとんどの紙数をこれにあててゐるところからみても、この第二篇は本書の核心ともいはるべきものである。本書によれば、『資本論』を体系たらしめていける原理的端緒としての、賃労働者の商品化構造は、すでに一八四四年、青年マルクスの思想発酵期における最大傑作『経済学・哲学手稿』においてみられる。もちろん、そこでは労働者の商品化とか人間商品という形で、近代フロレタリアートを奴隸と同一視する面がなかつたとはいえない。しかし基

本的には、賃労働者を「自己意識ある・自己活動的な商品」として把握し、賃労働者が資本制社会では、その社会的実在性として商品であると同時に、そこで自己の人間性を自覚する限り、この商品としての実在性を否定せねばならない、このような自己矛盾的構造をもつた「人間商品」であること、このような実在性と否定性の統一として、賃労働者の商品構造を『経済学・哲学手稿』はとらえている。そしてとくに、たんなる商品でなく、「自己意識ある」商品として否定性の契機を重視していること、ここに青年マルクスがヘーゲルの向自有の論理を継承した面があらわれており、また、賃労働者が商品化されているとしても、この疎外が自己疎外である点で、奴隸と本質的に異なることも、マルクスは見抜いていた。この自己疎外の論理は青年マルクスがヘーゲルから継承したものであるが、しかしそれは、フォイエルバッハの唯物論の地盤において発展的に継承されたものである。したがつて、マルクス的自己疎外の論理の特徴点は、つぎの面によくあらわれる。自己の対象化・外在化として定立される対象が、ヘーゲルのように人間意識の内にではなく、外にあり、したがつて、自己に対立するこの対象の克服も、ヘーゲルのように、

対象にたいする意識の止揚とならずに、自然の一部としての人の生命活動としてあらわれる。マルクスがたんに「自己意識ある」としてでなく、同時に「自己活動的な商品」として、貨労働者をとらえた所以も、ここにある。

以上、本書第二篇は、その第一章「ヘーゲル的自己意識の唯物論化」で、とりあえず、まだ資本制社会において自己疎外におちつていらない本来の生産的労働者、つまり貨労働者の論理構造の本質規定を、このように解明し、つづいて、それが資本制社会において、どのように特殊化、具体化されているかを、つぎの第二、第三、第四章で展開していく。

まず最初は、たんなる商品流通の過程（労働市場）で疎外されている貨労働者の論理構造が、「單なる商品人間」の論理構造として、つぎのように解明される（第二章）。すなわち、そこでは貨労働者は、自己の労働力を商品として売らざるをえない経済的不自由にあり、その欲望も、所有欲ないし

者はこの労働力商品の所有者として、貨幣所有者としての資本家と法律的に対等の関係にある。もちろん、ここで貨労働者は商品所有者として法的に自由・平等だといつても、そのことは、商品としての労働力を売らざるをえない経済的不自由を排除するものでなく、したがってこの自由は、あくまでも形式的・観念的、それゆえに法的な自由にすぎない。とはいっても、そこでは法的人格者として、その経済的不自由であることにたいし批判的立場をとりうる契機が内在している。すなわち向自有的反省の基盤が、ここ労働市場での貨労働者にあり、そこに「單なる商品人間」の論理構造を「自己意識ある商品人間」ととらえた意味がある。しかし、このように経済的不自由を自己矛盾として自覚できる場は、生産的労働としての行為のなかであり、この労働市場では、貨労働者は法的人格として一応経済的不自由にたいし無関心でありうるし、そこにまた法的自由あるいは「單なる商品人間」の限界がある。

ところが、貨労働者が流通過程から生産過程に入るや、貨労働者はまったく奴隸的な自己疎外におちいるほかない。そこでは、好むと好まさるとにかかわりなく、自己の人の生

命が喪失させられていることを、その労働生産物において、また労働そのものにおいて、体験させられる。すなはち資本制的生産過程において、労働者は、自己の生命活動の実現である労働生産物において、あるいはその生命活動そのものにおいて、自己を喪失するという、自己矛盾的構造をもつ。それだけに、労働者はこの疎外された活動ならびにその対象化としての生産物（とくに生産手段）を、否定さるべき現象としてとらえ、労働を「ベストのように忌み嫌い」、あるいは動物的な生活に追いかまられる。しかし、このような資本にたいする労働者の心理的ないは生理的抵抗によって、労働者の擁護しようとするものは何か。それをわれわれは考えねばならぬ。これこそ、資本制的生産過程で奪われようとしている人間の本質たる種属的生命なのである。では、ここでいうマルクスの人間的種属生命とはいかななる内容のものであるか。それはヘーゲルの生命觀を「徹底せる自然主義」の立場で唯物論化し、人間主体の自然客体にたいする働きかけによる生命的統一の過程を、この人間主体の実践を媒介とする、自然客体の発展過程として、したがつて自然客体の自己関係としてとらえたものである。マルクスがその『経済学・哲学

手稿』で、人間は死ぬまいとすれば、自然によつてたえず前進を続けねばならない、とのべていることの意味は、このよくな自然の自己関係としての生命觀にほかならない。そしてこれを自覺しているところに、他の生命と異なる人間的命の無限性があり、したがつて人間的種属生命は全自然を対象に、自由に再生産しうるのであり、またそこにいて、人間の種属的本質が現実的に確証されるのである。しかるに、資本制的生産過程においては、この人間種属の存立根拠である自然が、人間から疎外され、さらに人間種属を現実的に確証する生命活動としての労働が疎外されていることによって、それは人間から種属を疎外し、人間社会の全体性を階級的に分裂させ、それは具体的には、「非労働人間」と「単なる労働人間」の支配服従の階級社会となつてあらわれる。こうして、現実には私有財産を所有しないものが、その労働力を商品として売り、疎外された労働をせざるをえないものであるが、以上の「疎外された労働」概念のマルクスによる分析結果は、その逆であることを、つまり疎外された労働人間の自己矛盾が、労働人間の生産物を非労働人間の所有物に転化せしめる

以上、本書第二篇第三章は、マルクス『経済学・哲学手稿』中の「疎外された労働」断片にみられる、有名な「疎外された労働」概念の四規定を体系的に関連させつつ分析して、「單なる労働人間」の論理構造を解明し、それが、「單なる商品人間」として流通過程にあらわれている貨労働者の自己疎外の根柢である所以を、最後の結論とする。

こうして、「單なる労働人間」が「單なる商品人間」の根柢である所以（資本制的私有財産制度の概念的把握）があきらかにされたが、この「單なる労働人間」としての貨労働者は、流通過程における「單なる商品人間」の「自己意識ある商品人間」とくらべて、どのような特徴を有しているのであらうか。彼が資本制的生産過程で否応なしに自己矛盾を体験させられるという利点を有していることは、すでに指摘したとおりである。しかもこの労働という生命活動そのものは、この自己矛盾解決の場である。しかし他面、そこでは、その生命的自己関係が喪失させられることによって、この自己矛盾の解決は自覚的でなく、ただ動物的生活を避けて人間的生活を主張する、あるいは、それにたいし生命的抵抗をするという段階にとどまらざるをえない。「單なる労働人間」

が自己意識を欠いた、たんなる「自己活動的な商品人間」である所以が、ここにある。

こうしていまや、「單なる商品人間」と「單なる労働人間」のそれぞれの一面性が止揚され、その相互媒介による自己統一として、現実的な貨労働者の論理構造が、この第二篇の終章（第四章）で明らかにされる。すでに述べたように、現実の貨労働者は、「單なる商品人間」としては、たとえ観念的、形式的とはいえ、労働力という商品の所有者として独立の主体性を有していた。しかしまや、この貨労働者は、「單なる労働人間」として生産過程に入り、そこで経済的不自由を体験させられることによって、さきの主体性がまったくの仮象にすぎないことを自覚する。しかし、この「單なる労働人間」において生じた自覚は、「單なる商品人間」として保持していた主体性の放棄を意味するものではない。むしろここでは、「單なる労働人間」としての経済的不自由、人間の種属的生命の喪失が自覚されており、それを否定し去らんとする、新しい主体性がうみだされている。それは「單なる商品人間」においてみられた自己意識の契機なくしては不可能である。その意味では、貨労働者が「單なる商品人間」として、

労働市場（流通過程）で保持していた観念的形式的自由は、たんに仮象としてしりぞけられるべきものでなく、むしろ労働者が自己の生命、生活の全体を資本家に隸属させていることから解放するための手段として、積極的な条件として、あくまで堅持されなければならないのである。こうして、現実的な資労働者は、「単なる商品人間」と「単なる労働人間」の相互媒介的自己統一として、その經濟的不自由との自己矛盾を自覚しているのであり、これがマルクスのいう「自己意識ある自己活動的な人間商品」の論理構造の具体的な内容なのである。したがつてそれを発展させれば、資労働者は、その自己喪失としての資本制生産過程において、自己の生命的無限性一種属的本質を反省し、階級的に自覚し、人類の立場に立つことになり、それは実践的な政治運動となつてあらわれるのである。

四

こうして、『資本論』を体系たらしめている原理的端緒は、マルクスのいわゆる現実的出発点の転化として主体的に把握すべきだという本書の立場、したがつて『資本論』冒頭の商

品を、たんなる対象的な商品としてでなく、「人間商品」としての資労働者の客体的契機として把握すべきだという本書の主張は、この資労働者の疎外された労働の産物としての商品的実在性のうちに、この疎外性を主張し、その種属的本質として「自己意識ある自己活動的な人間商品」という現実的資労働者の論理構造を解明したのである。ところで、この「自己意識ある自己活動的な人間商品」という論理構造をもつた現実の資労働者は、この「人間商品」としての自己矛盾を自覚しており、いうなれば、それはヘーゲル『論理学』での、向自有的論理構造である。しかし、学的体系の端緒は、ヘーゲルも主張しているように、あくまでも純粹に直接的なものでなければならない。みずから商品化を自覚している資労働者の論理構造は、学問的思惟の端緒たりえて、論理的端緒たりえない。といって『資本論』の方法論的端緒を主体的に把握する本書としては、この端緒は、自己運動の推進力としての自己矛盾を、それ自体に蔽しているものでなくてはならぬ。このディレンマを解き、なんら媒介性を含まない論理

的端緒を学問的思惟の端緒たらしめる論理を展開し、解明したのが、本書の最後、第三篇「マルクス主義経済哲学原理」の内容である。すなわち本篇は、さしあたり、みずからの商品化を自覚している労働者の向自有的論理構造から、自覚的契機を、つまり向自有の否定性の契機を捨象して、向自有の前段階である定有形態の労働者に、すなわち、まだ自己の「人間性」を、自己に内在する自己矛盾を自覚するに至らない労働者にまでさかのぼる。この定有形態にある労働者は、

定有というカテゴリーが、有と無との統一としての成の運動の成りである。たゞ一個の商品として労働市場にある未自覚の労働者にすぎない。しかし、といって定有において、その内容である成の運動が消滅したわけではない。否、定有は成の自己疎外と解すべきである。とすれば、この定有形態にある労働者には、この成をとりもどす、とくに有としての規定を否定しようとする主体的な無の運動の契機が内在しているはずである。この定有的静止のなかで自己運動のための原動力ないしは契機としてあるもの、静中動ともいいうべきもの、ここに本篇は、理論的端緒としての未自覚的労働者の定有的形態が、同時に学問的思惟の端緒たりうる論理

的根拠をみいだす。この定有における静中動は、具体的には、資本制社会の生産過程において、自己の生命活動を自己喪失せざるをえない労働者の苦悩としてあらわれる。しかしこの苦悩として、疎外された自己と自己自身との矛盾を感じとることは、そこから、自己本来の人間性を回復しようとする自覚的運動がはじまる最初の直接的契機、そのための端緒となるものではなかろうか。

五

以上が本書『経済哲学原理』の概要である。もちろん、その内容は、一方で、マルクスの『経済学・哲学手稿』を素材とし、他方では著者梯教授の多年の学問的蓄積であるヘーゲル哲学および西田・田辺哲学の研究成果を駆使されつつ、ここに、マルクス『資本論』を「論理学」として、且つ主体的に把握するマルクス主義的経済哲学の原理が、教授の強靭な思弁力によって、なんらのまやかしも許さず、きめこまかく且つ論理的に展開されているのであって、ヘーゲルおよび西田、田辺哲学にまつたくの門外漢である自分としては、本書の書評を受けたものの、本書をひもどくにつれ、まつたくの

悪戦苦闘、まさに本書の結びにあるように、苦悩する自己を自覚するに至り、はたしてこれで本書の特徴をよく伝えたか、むしろ、そのきめこまかなる論理を見すごし、あるいは牽強付会的に誤解した面が多々あるのではないか、とおそれでいる。しかしながらここで最後に、私の印象批評をあえてのべ、書評としての体裁をととのえたいと思う。

マルクスの経済学、『資本論』が、マルクスにおける思想と科学の統一であることは、ひとつの常識である。否、常識であったと表現せざるをえないほど、今日その常識が失われ、科学主義が横行し、マルクス経済学の近経化の危険さみられる時期において、社会科学としての経済学を思想と科学の統一として把握することの重要性を、たんに説教としてではなく、合理的論理的に解明した本書の意義は、はじめに指摘しておいたように、いくら強調しても強調しすぎることはなかろう。このような本書の立場は、『資本論』を初期マルクスの『経済学・哲学手稿』との関連で把握させ、そのばあいでも、レーヴィット、マルクーゼらの西欧マルクス研究者の修正主義にたいする批判もさることながら、ソビエト、東欧のマルクス研究者にみられる客觀主義的傾向にたいする批判が

強くじみ出ている（本書序文）。一言でいえば、それは『資本論』の主体的把握であり、『資本論』が経済哲学としてしか成立しえない根拠の解明であり、それをもつとも端的に示しているのが、『資本論』冒頭の「商品」の矛盾的構造と価値と価値の矛盾を、『資本論』第二篇第四章、第五章との関連で、「人間商品」としての貨労働者の自己矛盾的構造ととらえたことである。もちろん、そこでは同時に、初期マルクスの『経済学・哲学手稿』が、著者のヘーゲル哲学にたいする批判的攝取を媒介として活用されており、それはまたそれで、難解な『経済学・哲学手稿』にたいする、われわれの理解をふかめ、その宝庫たる所以を再認識させる面が多い。とくに「種属的命」概念について、その感が強い。

ところで、問題をもう少しその中味にはいって、資本論を体系たらしめている原理的端緒としての、貨労働者の概念的把握そのもの（本書第二篇）——それは本書の核心でもあつた——について、一、二の感想を最後にのべてみたい。卒直にいって、貨労働者にたいする「人間商品」の自己矛盾的構造という、著者の把握には、著者のいう「單なる商品人間」に重点がおかれてきている嫌いがある。もちろん、貨労働者

が自己矛盾を自覚する場が、「単なる労働人間」としての生産過程であることは、くりかえし強調されている。しかし、その資本制生産過程において、労働者は、自己の生産し、自己の所有に帰すべき生産物が、すべて資本家の私有財産であることに気づくはずだし、そして、このような資本制的私有財産にたいする否定的自己反省の契機は、「単なる商品人間」としての法的自由だから、それはぜひとも確保せねばならないという著者の立言は、これを経済思想史的類推をもつて表現するならば、リカード派社会主義の段階にあるといえないだろうか。さきに、労働者の概念的把握は「単なる商品人間」に重点をおきすぎてはいないか、といったのは、この意味である。たしかに、マルクス自身における経済理論の生成・発展は、ある意味では、ここでいう法的自由と経済的不自由の両者の関係で象徴される問題をめぐっておこなわれ

の唯物論の地盤において発展的に継承したものである、といふ著者の把握にたいしても、私は賛成である。とすれば、貢労者の自己矛盾は、貢労者の自覚だけでは解決しえないのではなかろうか。主体的唯物論は唯物論的実践論によつて打ちされねばならない。マルクスは、たしかに偉大な経済学者であった。しかし、また、経済学者にとどまらなかつた。マルクスが『経済学・哲学手稿』以後、何故あれほど多面的に経済学と取り組み、膨大な経済資料をあさつたか。もちろん、それは彼がたんなる経済学者でなかつたからであるが、しかし、マルクスの『論理学』が『資本論』として結実した意味も、われわれは忘れてはならない、と思う。もつと本書の内容に立ち入つて論すべきであつたが、浅学のため、はなはだ高踏的な印象批評におわつたことを、最後にふかくおわびしたい。

(一九六二年一二月、日本評論新社刊)

生成・発展は、ある意味では、ここでいう法的自由と経済的不自由の両者の関係で象徴される問題をめぐっておこなわれていた、といつても過言ではなかろう。しかし、それは経済的不自由を法的自由で自覚させる形ではなかろう。たびたびくりかえしてのべてきたように、著者のいう、『資本論』の主体的把握に、私も基本的に賛成である。と同時に、マルクスの自己疎外の論理が、ヘーゲルのそれをフォイエルバッハ